

倉掛のぞみ園

特別養護



倉掛のぞみ園は、閑静で居住環境の良好な安佐北区高陽ニュータウンの一角にあり、被爆の方々が安心して心豊かな生活を送っていただくことができるよう、クラブ活動室や陶芸設備のある機能訓練室、シャワーベッドをはじめ最新の設備を備えるなど居住性に配慮されており、平成4年(1992年)7月に入園定員300人の特別養護施設として開設され、平成8年(1996年)4月から定員4人のショートステイも実施している。

所在地：〒739-1743 広島市安佐北区倉掛三丁目50番1号
(TEL 082-845-5025)
(FAX 082-845-6934)

偶然で救われた命

今田キヨミ（八十九歳）



被爆地……千田町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……下痢・軽い脱毛
家族の死亡……なし
現在の病状……骨粗鬆症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

両親は早くに亡くなり、八人兄弟の末っ子の妹は、まだ三歳でした。

当時、千田町の実家に、祖母と妹と三人で住んでいましたが、いざ空襲になつたら、避難が難しくなるということで、祖母と妹は古市（ふるいち）のアパートに疎開していました。

当時、私の勤務先は、「鉄鋼統制会」といい、原爆ドームの対岸のビルにありました。

当日の朝、私は忘れ物をしたので、取りに帰つたため、いつもの電車ではなく、「一便遅れて乗車しました。その時の様子ですが、突然「ピカーン」と光り、「ドーン」

と音が響き、電車は大きく揺れて止まりました。爆風を受けた側の窓は割れ、中にいる人達のシャツは破れ、血が流れていきました。横川方面から、男性達が体から血を流しながら、走つて逃げる様子に、一体何が起つてているのか、胸がドキドキしました。私は幸いなことに、怪我はなかつたですが、もし一便早い電車に乗つていたら、どうになつていたかと思うとゾーッとしました。

私は一度古市に寄り、リュックの中にバスタオル、食料、衣類を詰め、広島市内に歩いて向かいました。白島に着いたら周囲は火の海でした。びつしより濡らしたバスタオルを頭からかぶり、薄暗くなつた二部隊の練兵場の中を歩きました。途中かすかな声で「水ちようだい」と聞こえできました。命最後の声だったと思ひます。

大橋の川岸や川の中には、沢山の死体がありました。私はただ、畠然とするばかりでした。その中には、二人の子供を連れた母親が、そのままの姿で、真つ黒な炭になつっていました。

私はただ呆然と見つめながら、千田町方面へ歩いて行き、日暮れて自宅に着きました。家は焼けて、頑丈な鉄筋作りの物干し場だけが残つていました。祖母と妹は、無事でした。再会した時は三人で抱き合い泣きました。

その後、私は筒瀬に嫁ぎ、子供を育てました。妹と弟は、癌で亡くなりました。原

爆の後遺症(こういしょう)だと思っています。

私は当日、一便送れて乗車したことの偶然により命を救われました。現在、のぞみ園に入園させて頂き、感謝の毎日です。

どうか世界中が原子爆弾のない、平和な日々でありますように祈っております。

今も忘れられない六十五年前のあの日

岩田良子（八十七歳）



| | | |
|---------|---|------------------|
| 被爆地 | … | 南段原町（爆心地より二・二km） |
| 当時の急性症状 | … | 下痢 |
| 家族の死亡 | … | なし |
| 現在の病状 | … | 変形性腰椎症・糖尿病・高血圧症 |

被爆時の状況及びその後の生活

今から六十五年前、私は南段原町で夫と一人暮らしをしていました。七月に呉の空(みなみだんばら)

襲でいろいろとお世話になつて、いた叔母を亡くしたばかりの八月六日の朝のことでした。

あの日、私は中野村に疎開していた夫の母の所に、配給のあつた大豆を持って行こうと家の中で支度をしていました。真夏なので障子を開けていたら、突然、外に見えていた女子商の校舎が宙に浮いた後、「バリツ」という今まで聞いたこともない音とともに、べっしやんこになりました。私の家は、屋根の形が残つたままの状態で崩れ、家中にいた夫も私も、外に放り出されました。私はモンペが破れたりしていましたが、かすり傷だけで、夫も無事でした。比治山があつたおかげで、被害が少なかつたんでしょう。

それから、船越にある実家のことが気になり、船越に向かいましたが、その途中、振り返ると空がまつ黒になつていていました。

被爆後は、船越の実家に泊まり、自宅の片付けをするために段原に通つていきましたが、その道中の大洲のぶどう畑に大きな穴が掘つてあり、そこにトラックが死体を運んでいた光景を、毎日のように見ました。胸が締めつけられ、ただ、ただ、手を合わせるばかりでした。その後、段原の自宅も修理が終わり、幸い食べるものにも困らず、二人の子供にも恵まれました。

今は、倉掛のぞみ園で行事や慰問に参加して楽しく生活しています。毎日、布おむつをたたんでいますが、いろいろな人達に感謝の気持ちを込めて、一枚一枚たたんでいます。

遠くから、学生さん達が平和学習に来られますが、二度とあのような戦争をしないよう望むばかりです。戦争は絶対しないよう、若い人達に伝えたいです。六十五年前のあのような悲惨な思いを、若い人達に味わせたくありません。

戦争で亡くなつた人達への思いと平和を願つて、朝と晩に必ず手を合せています。



地元幼稚園児の慰問

この広島で生きること

落 畠 トミコ（九十七歳）



被爆地…………三篠本町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……下痢・脱毛・歯茎の出血
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症・腰痛症・リュウマチ性関節炎

被爆時の状況及びその後の生活

朝八時、五歳の次男は近所の子供達五、六人と庭先で、元気に遊んでいました。

主人を仕事に送り出した私は、疎開そかいしていいる長男の荷造りをして、縁側の押入れにしまった時でした。青白いドロツとした稻光いながりがあつた途端とたん、意識がなくなりました。どれ位経たつたか「お母ちゃん痛いよう」と泣いていいる子供の声で目が覚めました。

私は倒壊とうかいした家の中で、裏返しになつた畳の下敷きになつていきました。どうにか身動きがとれ、這はい出しました。服は縫ぬい目だけが残り、肌はむき出しで、全身にひつかいたような傷があり、血で真赤でした。次男の頭には瓦かわらが刺さり、イガ栗イガスズメがはじけ

たようになつており、救急用品の入つている袋から、三角巾と包帯を出し、頭を水で洗つてやり手当をしました。次男は、私が履物をとりに家に入つている間に、近所の娘さんと古市方面へ逃げていきました。「お母ちやーん」「水を下さうい」悲痛な叫び声と、子供の名前を呼びながら、息絶えて逝く人を見ました。三滝の川のほとりは、男女、老人、赤子を抱いたまま逝つた人で埋もれていました。

原爆が落ちて二十分位経ち、横川から自宅に火が廻つてきました。火の無い所から、ポツポツと火の手が上がり、電柱に火が舞い上がり、サーッと駆け降りる所もあれば、草むらや石の間から、火が出てあつという間に燃え広がりました。私は逃げないで、ドブの水で火を消しましたが間に合うものではありません。

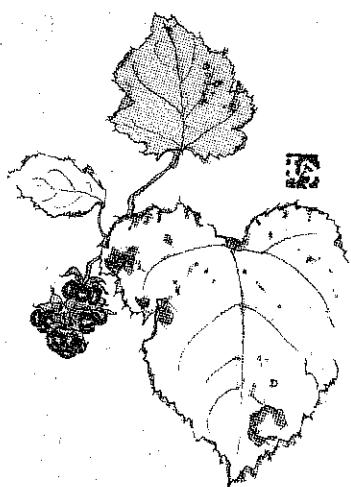
それから、夕方のような空模様になり、短い間でしたが、パラパラと落ちてきたかと思うとザーと、勢いよく降つてきた黒い雨を、トタンをかぶつて防ぎました。

翌日、焼け跡に小屋を建て住み始めました。その小屋は夜になると、ハエが入つてき、壁や天井を埋めつくしました。掃つても掃つても入り、明け方には、またいなくななりました。その数は減ることなく、連日繰り返し続きました。

生きている人間に蛆がわき、鼻の穴、口、耳から出てくるのです。その光景は地獄のようでした。地上にあるものは食べではないと伝達が回りましたが、地中にあ

るゴボウを焼いて食べました。炊き出しが始まり、その中には、小麦粉のむすびもありましたが、とても食べられる物ではありませんでした。

今、私は戦争・原爆に対して、何の感情もわきません。ただ、戦争が終わって良かったと思っています。地獄、極楽はこの世にあると思います。^たここでお世話になつてるのは、極楽のような気がします。被爆者だけが^{わざら}患つているではありません。受けていらない人も、病気になり、先に逝つた人もいます。被爆した私が長生きをさせてもらつてるのは、自分の定めだと思つています。



亡き兄を思う

踊場卓治（八十歳）



被爆地……南蟹屋町（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……糖尿病・腰部脊柱管狭窄症・慢性肝炎
前立腺肥大症・高脂血症・変形性脊椎症

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時、中学四年（十四歳）でした。次兄は当時二十一歳で、小学校の先生をしていました。四月に召集が来て出兵し、一度は帰つてきましたが、一週間後に再度召集となり、八本松から夜行で南方に行きました。その次兄がフイリピン・バリオで戦死した為、私は中途退学し少年飛行隊を受験しました。しかし、重症のトラコーマの為、不合格になりました。目の治療後、南蟹屋町の国鉄第一機関区に入りました。八月六日の朝、第一機関区の点呼があり、解散の号令があつた時、目の前に閃光が

走つたかと思うと「ドカーン」と音がして灰が舞い上がり（機関区は石炭の灰が沢山積んであつた為）目の前が見えなくなりました。何があつたのか解らないので、そのままじつとしていました。灰が収まつた後、周りを見ると、二階建ての寮は壊れており、事務所も屋根が飛んでいて周りの家はべつちやんこでした。私達は幸い、事務所があつた為に怪我をしないで済みました。私達は逃げる所もなく、無事だつた機関助手の寮で過ごすことにしました。機関区から東は蓮根畠で、当時食べるものが無く、その蓮根を焼いて食べました。

汽車も動き、私も体調の変化がなかつたので、仕事を続けましたが、徹夜になることが多く、秋口には辞めて田舎に帰りました。家族は能美に住んでいた為に無事でした。田舎では両親と共に百姓をし、その後、三菱造船所に就職し、二十歳迄勤めました。母の勧めもあり、手に職をつける為、洋服の仕立を習い独立をしました。四十九歳迄続けて、三人の子供を育てました。眼の衰えから仕事が辛くなり、五十歳から六十八歳迄は、タクシーの乗務員をしました。

私は現在、沢山の病気を抱え車椅子での生活をしています。身体の左半分の感覺が鈍いので不自由ですが、のぞみ園での生活にも慣れてきました。

広島・長崎と二つの原爆で大きな犠牲を出し終戦となりました。一度と繰返しては

いけないと願っています。



原爆死没者慰靈碑参拝

病弱な母に代わつて

川本艶子（八十二歳）



被爆地：入市（八月十日・西練兵場）

当時の急性症状：なし

家族の死亡：なし

現在の病状：肺気腫・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は可部の谷和に住んでいました。八月六日の早朝、病弱な母に代り、出征する近所の人を見送るため、婦人会のたすきをかけて、勝木まで歩いて出ました。

その帰り道の事です。中山に差しかかった時、突然「ピカッ」と光り、その後「ドーン」と音がした瞬間に、山の木々がザーッと音を立てて揺れました。何が起つたのかわからず、みんなと山の中に隠れましたが、母が心配になり家に戻りました。

この年の五月七日に、父が亡くなり、長兄はソロモンで戦死、次兄は基町の陸軍になりましたので、畑仕事は全部十七歳の私の身にかかつっていました。翌日も百姓をし

ていた所、近所の人から「広島が大だい」とじやのにのん気にしとるのお、うちのおばあらは観音かんおんに行つたで、皆死んどつたがのお」そんな大だいとなら、誰かが知しらせてくれると思つていましたが、急に次兄が心配になりました。

八日の早朝、十二歳の弟を連れて可部駅まで歩き、広島に向かいました。電車に乗つたものの、古市ふるいちの駅で「この先は行けないから歩いて下ささい」と放送があつたので、横川駅を目指して歩き続けました。やつと着いた横川駅は、屋根も何も無くなつていました。駅の曲つた所を何気なく見たら、電車が斜めになつており、まだ煙が出ていました。

行く先々で「子供が来る所じやないから帰れ」と言われましたが、ここまで來たんじやから行かにやあと思つて、広島城の方から、八日から十日までの三日間、あちこち捜しましたが、次兄は見つかりませんでした。

重い足で家に帰りましたら、お寺や小学校には、沢山たくさんの人が運び込まれていました。その人達のお世話をするために、母に代つて救護きゅうごに行きました。ひどい光景でした。焼けた皮をめくると、そこには蛆うじがわいていて、それを箸はしで取り空缶あきかんに入れました。水が欲しいと頼まれても、あげたら死んでしまうと言われ、あげる事も出来ませんでした。

結局捜して^{さが}いた次兄は、隊^{こと}下関に移つており、原爆はまぬがれましたが、後日、病死の知らせが届きました。私は一人の兄を戦争で亡くしたのです。兄達が生きていてくれたら、ちょっとは私の生き方も変わっていたかもと思います。

「戦争はいけん」心から伝えたい思いです。

戦争は絶対にだめです

小 松 喜代子（八十七歳）

被 爆 地 …… 千田町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状 …… 火傷
家 族 の 死 亡 …… 母・子
現 在 の 病 状 …… 甲状腺機能低下症



被爆時の状況及びその後の生活

私は当時、宇品のあかつき部隊で、電話交換手をしていましたが、その日（八月六

日) は仕事もなく、二歳の子供と父母のいる千田町の実家に帰つて いました。父は被服廠(洋服を縫つていた)に勤めに出ておりました。

原爆が投下され、爆風と共に家は壊れましたが、私と子供はかろうじて火傷で済みました。母は背中に大火傷を負いました。近くの病院(日赤)に行こうとしましたが、人が沢山いて診てもらいうことができませんでした。ゴザに寝かしたままウジが湧いて、「アメリカは鬼じやの」と言つて、四日後に母は亡くなりました。最後の言葉は今も鮮明に覚えています。

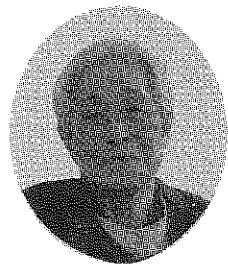
近くに女学校があり、夏休み中に出てきた生徒や、近所の人達も大勢亡くなりました。電車も真赤に焼けて、逃げ切れない人達は、中で重なり合つて亡くなつていきました。水を求めてか防火用水に男性の死体がありました。とても悲惨な光景でした。しばらくして、火傷(やけど)ですんだと思った子供が亡くなつた後、主人が沖縄から帰広しました。悲しみにくれる中、私達は、主人の里である大竹(おおたけ)に移り住み、新たな生活を始めました。その後も色々な事がありました。

今、あれから何十年経つても、変わらぬ思いは、「戦争は絶対ダメです!」という事です。

これからも機会があれば、若い人達に伝えていきたいと思います。

十五歳の夏の空

杉田邦子（七十九歳）



| | | |
|---------|---|----------------|
| 被爆地 | … | 幟町（爆心地より一・五km） |
| 当時の急性症状 | … | 下痢・嘔吐 |
| 家族の死亡 | … | なし |
| 現在の病状 | … | 脳内出血後遺症・狭心症 |

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝、空の青さはとても綺麗でした。そうした青空を仰ぎ見ながら「行つて来ます」と、元気よく十五歳の私は、矢野の我が家を後にしました。

八時、幟町の職場に到着。「おはよう」と同級生達の明るい声が響く中、しばらくして、「飛行機」という甲高い声に、皆一齊に窓側に眼をやると、遙か向こうに銀色に光った小さな飛行機の姿。がやがやと銀色の機影を追つていると、突然、ピカツと光りました。私達のいた工場も周りの家屋も崩れ、気が付けば私達は、作業台の下に飛びっていました。

それまで明るかつた同級生の声は、「お母さん」「お父さん」「先生」という呼び声へと変わりました。何がなんだから分からぬまま、どれだけの時間が経つたのでしょうか。工場の前を行き交う人達の顔からは、血が流れ落ち、着物はボロボロに破れて垂れ下り、男の人か女人の人かさえ判らないようになりながら、我が子の名前を、家族の名前を呼びながら、ぞろぞろと歩く姿がありました。私達もその人の流れに誘われて、歩き出しました。途中「熱いよー」「助けてー」という、うめき声を聞きながら、着いた所は、避難場所である縮景園でした。そこには、ずいぶんの人がいました。うつろな眼で



縮景園 爆心地から約1300mの縮景園の正面、南方から北方に望む。
(川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供)

遠くを眺めている人。弱々しい声で我が子の名前を呼ぶ人。家族の名前を呼ぶ人。風にあおられて、焼け焦げたトタンやたる木が、私の傍らをびゅんびゅんと飛んでいました。私は空いている場所に腰を下ろし、心中はずつと泣き出しそうな気持ちをグッと抑えていました。どれぐらいの時間が経つたかわかりませんが、歩いて自宅に着いたのは夜の八時ごろだったと思います。その翌日からは、吐氣に苦しみ嘔吐はきけを繰返す日々でした。

被爆から数年たち、教員として働きましたが、生徒に原爆のことを語ることは出来ませんでした。

現在、のぞみ園で生活しています。全国各地から平和学習に来られる生徒さんと触れ合いううちに、平和への思いから原爆のことを語れるようになりました。

戦争の無い日々が、永く続くように祈ります。

被爆後の我が家を見に行く

住原 登始子（八十七歳）



被爆地……入市（八月七日・觀音本町）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……脳底動脈循環不全症・発作性頻脈

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝、疎開そかいしていた安佐郡字末光村の阿弥陀堂にいた時、「ドカーン！」と大きな音が聞こえました。びっくりしたと言うか、いいようのない音でした。そして、ふと広島方面を見た時、真白いきのこ雲がモクモクと大きくなりました。それがピカドンだと、後から聞きました。私たち一家（夫、二歳の娘、私の父）は、被爆の十日位前に末光村に疎開すえみつむらしてお陰おかげで命が助かりました。

我が家は、舟入町にありました。家がどうなつているのか見るため、八月七日、家族で広島に出ました。その途中、舟入町の方までずっと、焼けて灰になつていました。

あちこちに黒くなつた死骸しがいがありました。それは悲惨な有様ありさまで言葉ひざんになりませんでした。私の家も、勿論もちろん、影も形もありませんでした。どこの家も風呂釜ふろがまだけがポツカリと浮かんでいるようでした。それから、觀音町かんのんにある親戚しんせきの家が気にかかり見に行きました。家は倒れて崩くずれていました。父親が残り、泊まりこんで雨がしのげる程度の小屋を作りました。

そして、八月十五日、昼十二時、戦争が終わつたとの天皇陛下の言葉を聞き、心からほつとしました。私たちの家は、壊おちれて住めなかつたので、村の人達にお許しをいただいて、佛様ほとけさまのおられる阿弥陀堂あみだどうの部屋を借り、しばらくそこで暮しておりました。そのうちに韓国かんこくの人々が国に帰られましたので、その家を譲りうけ、田畠を作りながら暮しました。

今は、のぞみ園きよとうぶで同じ境遇の人達と楽しく感謝の日々を送っています。

戦中戦後を経一杯生きて

田 中 政 美（八十七歳）



被爆地……入市（八月七日・的場町）
当時の急性症状……脱毛
家族の死亡……なし
現在の病状……脳挫傷後遺症

被爆時の状況及びその後の生活

原爆が落ちた當時、私は呉市から母親の住んでいた向洋に、一歳半の長女と生まれて間もない次女を連れて疎開していました。

当日、朝八時すぎに、私は家の中にいました。赤い閃光が走つて、すごい音がして、氣を失つて倒れていきました。気が付くと、家の窓ガラスが全部壊れて、頭・顔・腕・足などにガラス片が刺さつて体中が血だらけになつていました。

その翌日、広島の女学校に通つていた妹が学徒動員で、建物疎開をしに出かけたまま帰つてこない為に、長女を背負つて徒步で向洋から市内の的場に入りました。

えんこうばし

あいおいばし

猿猴橋を渡り、相生橋まで歩いて
行く途中に、顔半分皮膚が破れて
垂れ下がり、電車の窓から首を出
して亡くなっている人や、道路一
杯に人やガレキが倒れて足の踏み
場もない状態でした。川の方を見
ると、沢山の人が川の中で大きく
ふくれて浮いていました。

道路脇のテントの中で、火傷を
して横になつた人が「水をくれ、
水をくれ」と叫んでいましたが、
どうすることも出来ませんでした。

日本銀行の石段の途中で、母親が
赤ちゃんを抱いて、乳房を出した
まま亡くなつていました。

紙屋町の交差点で四列に順序よく



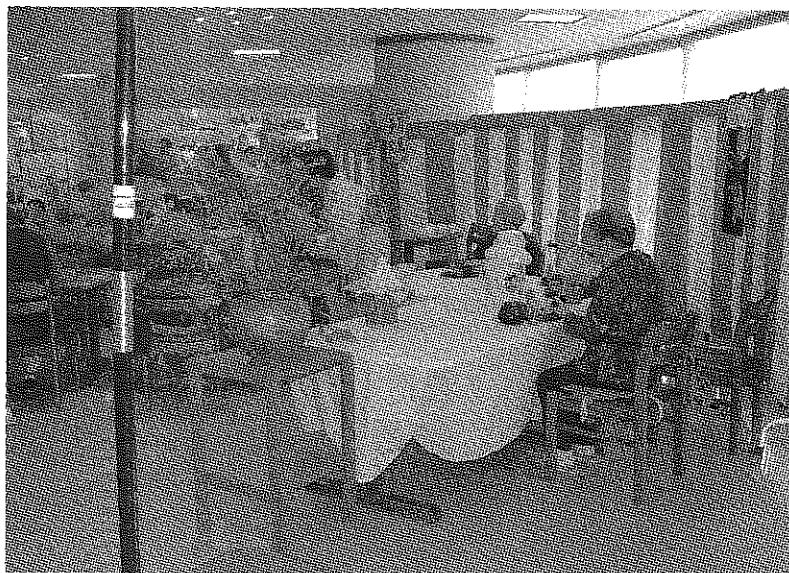
紙屋町交差点南東側から本通り方面

1913（大正2）年11月紙屋町交差点南東角にいち早く建ったレンガ造りの重厚
でお洒落な建物は、東側のレンガ壁の一部を残して崩れ落ちた。
(川原四儀氏撮影／広島原爆被災撮影者の会提供)

並んで倒れて、骸骨がいこつになつてゐる人達
が一杯いました。それが学生か、兵隊
かわかりませんでした。その日はどう
どう妹を見つけることが出来ないまま、
歩いて向洋むかいなだまで帰りました。その翌日、
妹は宇品の被服廠ひふくしょうへ避難ひなんして無事でし
たので、歩いて帰つてきました。

その後、私は髪の毛が全部抜け落ち
て、寝たり起きたりと病氣びょうきがちでなか
なか元気になりませんでした。また、
長女も病氣びょうきがちでした。

戦後は無我夢中むがむちゅうで生活してきましたが、
今は倉掛のぞみ園で静かにのんびりと
暮しています。戦争は二度としないで
ほしいです。



月見茶会

あの広島がなくなつた

前田房子（八十九歳）



被爆地……仁保町青崎（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……脳梗塞後遺症・右中大脳動脈閉鎖症

被爆時の状況及びその後の生活

あの日の事は決して忘れません。昭和二十年八月六日。当時、私は姉夫婦と三人で、東洋工業（現マツダ）近くの青崎に住んでいました。結婚していましたが、主人は兵隊に行つており、姉の家で暮していました。八時前に、家を出て畑に行きました。畑は、家から歩いて十分程のマツダの工場の側にありました。

草取りを始めてまもなく、ふと顔をあげるとはるか前方に飛行機が見えました。とてもよく晴れた日でしたので、飛行機が太陽の光で白く光つて見えました。音はまったくせず、別に気にすることでも無いと思い、再び草取りを始めました。その瞬間、

黒い物が目の前を横切つたと同時に、体が熱く感じ身をすくめました。その後「ドカーン」という爆発音がして、大きな雲がもくもくと立ちのぼるのが見えました。何がなんだかわからないまま家まで走つて帰りました。家中はガラスが割れ、ふすまや障子が倒れ、足の踏み場もない状態でした。どのくらい家のなかで、じつとしていたかわかりませんが、「広島がやられた、広島がやられた」という声で我に返りました。私がかぶつていた防空頭巾は、黒い部分だけが焼けており、中の綿が見えていましたが、幸い火傷はしていませんでした。白いブラウスには、黒い点々が付いていました。

八日、白島の友達を探しに広島駅まで行きました。広島駅から似島がすぐそこに見えました。いたるところから煙が上がっていました。「あの広島が：あの広島が無くなつた」と思いました。道端に倒れて動かない人。火傷の痛みを感じないのか、ボーと座り込んでいる人達が沢山いました。「助けてください」「水をください」という声が聞こえましたが、私は何もできず、どうしていいか、わかりませんでした。

若い人達には、戦争の恐ろしさと、平和の大切さを知つてほしい。何時までも戦争の無い、平和な日々が続くよう努力してほしい。

あの日から六十五年

宗 清 フタヨ（九十六歳）



被爆地：皆実町（爆心地より二・五km）
当時の急性症状：倦怠感

家族の死亡：夫

現在の病状：高血圧性心疾患・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は広島市皆実町三丁目に消防署に勤めていた主人、子供三人で住んでいました。八月六日、私は子供三人と家の中にいました。爆風で壁は剥がれ、家も傾いたものの大好きな怪我もなく助かりました。近所のおばさんから「千田町の方角から黄色の玉のような物が見えた」と聞きました。

私は八か月の赤ん坊をおぶり、子供二人と手を繋ぎ、隣組の人と丹那の学校へ歩いて避難しました。千田町や御幸橋から避難して来る人は、着ている服がボロボロにななり、火傷で顔の皮膚は、ジャガイモの皮を剥いたように垂れ下がり、唇が腫れて人相

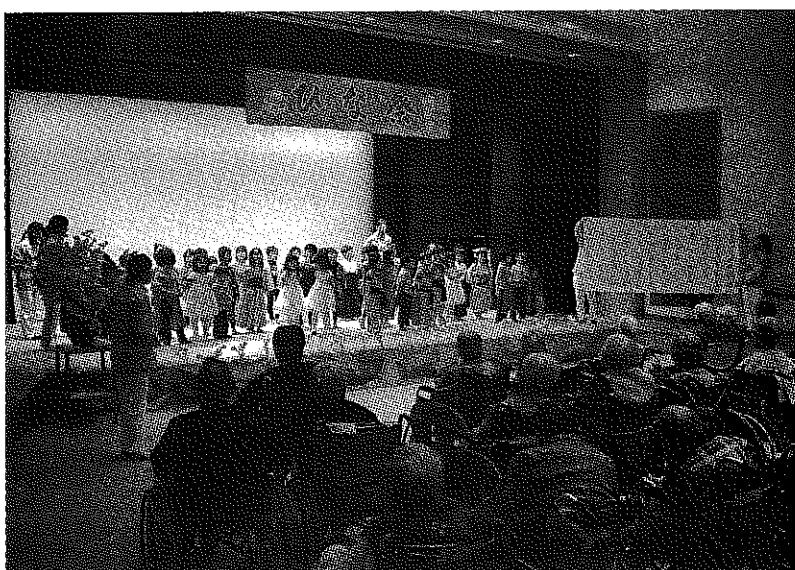
が変わりまともな人はいませんでした。昼過ぎ、避難場所で麦入りのむすびを貰い、夕方には家へ帰りました。

主人は、下流川町東消防署出張所に勤務しておりました。その日、勤務先から、ふぞろいのサンダルを履き、拾つた空瓶に水を汲み、飲みながら白いシャツ一枚で帰つてきました。私が主人の肩に手を当てるとき、「触るな、痛い」と叫びました。背中を見ると、シャツが血で真赤になり、乾いて力チカチになつていました。

四～五日経つた頃から、髪の毛が抜けてきて、私は「お父さん、散髪に行かなくても良いね」と冗談を言いました。この時は、これが死に繋がる事になるとは、思いもしませんでした。「髪の毛が抜ける人と、鼻血の出る人がおられた。自分は髪の毛が抜ける」と言つていきました。八月二十五日頃になると、歯茎が腫れ、苦しさのあまり、切ろうとしたのか「カミソリをくれ！」と叫びましたが、無かつたので諦めました。足が動かなくなり、寝込み、三九度の高熱が続き、そのうち血尿が出て、赤紫の斑点が頭から足の先まで全体に広がり、顔も細長くなり、人相が変わつてきました。吐く息は悪臭があしゅうたたよが漂い、暑く、ハエが集まるので、私は団扇であおいでやりました。姉の子供が、主人の顔を見に来て「おじさんが怖い」と、泣きながら帰つて行きました。今思い出しても、胸がつまり、涙が止まりません。「八月三十一日、午前十時三十五分

頃、主人は亡くなつてしましました。」
あれから六十五年、夢のように過ぎ
ました。今、私はのぞみ園で幸せに暮
しています。

合掌
がっしょう



ホームの「ひなまつり会」